



図217 平成6年の発掘調査



図216 遺跡の位置
5万分1地形図「新潟」

新五兵衛山遺跡 北区太田

新五兵衛山遺跡は、旧豊栄市域で内陸側から二番目の砂丘に立地する、平安時代を主とした遺跡である。

昭和四十一年（一九六六）・四十二年に大きな被害をもたらした羽越水害を契機として、恒久的対策として福島潟から直接日本海に注ぐ放水路の掘削が計画された。工事に先立って、昭和六十三年（一九八八）年と平成六（一九九四）年の二度にわたり、豊栄市教育委員会が六七五〇平方メートルを発掘調査した。長年、畑などとして利用されていたため、住居跡のような状態の良い遺構は発見されなかったが、平安時代の須恵器や土師器とともに、鍛冶炉と考えられる炉の底部や、フイゴ（炉に風を送る装置）の羽口（送風管）、炉の壁材などが見つかった。

出土した鉄滓の化学分析により、砂鉄製錬滓・精錬鍛冶滓・鍛錬鍛冶滓の三種が確認されたことから、新五兵衛山遺跡では、鉄素材の生産から鍛造鉄製品の仕上げまでの作業が行われていることが分かった。木炭の入手に不利であったと考えられる平野部でも、一貫した鉄



図218 鍛冶関連遺物 鉄滓・炉壁・羽口



図219 管状土錘

生産が行われていたことが分かる稀な遺跡となった。

このほか、魚網に付ける素焼きの錘（管状土錘）が二〇〇点近く出土した。同じ砂丘列上にある松影A遺跡や、西区の的場遺跡（一三六ページ）でも多くの管状土錘が出土しており、新五兵衛山遺跡は、魚網を用いた内水面漁業を盛んに行っていた遺跡の一つと考えられる。

豊栄地区周辺の地域では、奈良時代初めの八世紀前半ごろから、律令国家の主導によって村落が形成され始め、ほぼ同時に笹神丘陵で須恵器と鉄の生産、新潟東港付近の海岸で塩の生産が行われるようになる。平安時代を主とする新五兵衛山遺跡は、地域における手工業生産の一翼を平野部で担い、鉄製品の製造や打ち直しを行っていた集落だったと考えられる。